

「Dance as Work: ダンスにおける作品と仕事についての一考察」

児玉北斗（ダンサー／振付家／ダンス研究〈立命館大学大学院 先端総合学術研究科〉）

1. 自己紹介：ダンサーとしてのアイデンティティ

* 児玉がこれまで所属した主なダンス・カンパニー

- アルバータ・バレエ（カナダ・カルガリー、2001-2004 在籍）
- レ・グランバレエ・カナディアン・ドゥ・モントリオール（カナダ、2004-2008 在籍）
- ヨーテボリオペラ・ダンスカンパニー（スウェーデン、2008-2012 在籍）
- スウェーデン王立バレエ（スウェーデン、2012-2018 在籍）

* 自身のキャリアを事例として、ダンサーのアイデンティティとダンス・カンパニーという制度、そして「作品」の関連を考察する

- ダンス・カンパニーは助成や寄付を受けるため、独自の作品で構成された「レパートリー」で特色を出す必要がある
- どんな「作品」を踊っていきたいかを選ぶことがまずダンサーの自己表現であり、それに合わせて訓練を積み、キャリアを構築していくことになる
→ダンサーを巡る状況を理解するには、ダンス「作品」とはいかなるオブジェクトかを考える必要
- ダンスカンパニーにおけるダンサーの仕事は、「作品」を成立させること。そのために訓練を積み自己を鍛錬していく
- 古典バレエ中心のカンパニーとコンテンポラリー作品中心のカンパニーでは「作品」を成立させるという「仕事」に関する考え方、制度、訓練の違いがある
→ダンサーに何が要求されているかが異なるため、レパートリー作品は、どのような働き方になるか、そしてそれに合わせたカンパニーの構造自体を決めるような制度的影響力を持つ

「ダンス作品」の条件と、ダンスカンパニーという制度の構造、ダンサーの「仕事」には相互影響的な関係性がある

2. 研究：コレオグラフィーと作品

* これまでの研究成果

- 論文「コレオグラフィー、ダンスを書くことの系譜学」
- 発表・論文「2000年以降のダンス研究におけるネルソン・グッドマンのノーテーション理論：争点としてのオートグラフィック／アログラフィック」

* グッドマンのオートグラフィック／アログラフィックという概念について

ネルソン・グッドマン（Nelson Goodman, 1906-1998）が『芸術の言語』（グッドマン 2017=1976[1968]）で提示した記譜法理論と「オートグラフィック／アログラフィック」概念→現在までダンス研究において断続的に参照され続けている

- 「オートグラフィック／アログラフィック」

作品の「存在論的」な分類 →何が作品を成立させているか?という問題

- ・オートグラフィック Autographic (自筆的)
真贋が問題になる／唯一無二の存在／「制作の歴史」がその真正性を決定する芸術作品
- ・アログラフィック Allographic
一つの作品に複数の事例が存在 (文学や音楽など)／個人や時間という制限を乗り越える構造
／記譜法 (ノーテーション) によって可能となる

グッドマンはオートグラフィックからアログラフィックへの進歩的なモデルを想定し、記譜法によって「制作の歴史」から「解放」されると論じた。また、グッドマンによればダンスは前者から後者への移行過程にある。

* 先行研究を踏まえた私の見解：

- ダンスはオートグラフィック／アログラフィックという二分法にはうまく収まらない。だからこそ、ダンス作品を考察することで新たな芸術理論が提示される可能性がある
- ダンス作品の存在様態は芸術の制度のなかにうまくはまらず、よって常にオートグラフ／アログラフという既存の2つの方向に引っ張られ続けている
- ダンス作品のこのアンビバレントな様態と、オートグラフ／アログラフという芸術の真正性を決定する既存の制度とのズレが、ダンス・カンパニーにおけるダンサーの「仕事」にも関係しているのではないだろうか

3. Dance as Work: ダンスにおける作品と仕事についての一考察

3.1 ダンサーの「仕事」

グッドマンのオートグラフィック／アログラフィックを念頭に置くと

- オートグラフィック→唯一の「存在」の提示
- アログラフィック→決められた「動き」の遂行

ダンスはこの二分法にきれいには収まらないが、ダンスの双方への「引き裂かれ」を示唆

この両者がダンス作品を成立させようとする実践において複雑に絡み合う

ダンサーは時に唯一の存在の提示を求められ、またある時には画一的に決められた動きの遂行を求められる

3.2 バレエ

- 動きの体系があり、記譜できる→アログラフィックな傾向
- だが芸術としての価値を担保するのは「上演の質」
- バレエにおけるスター・ダンサーの重要性
→まずアログラフィックな動きの遂行の質が重要
→だが、作品の価値を担保し続けることで、ダンサーが自らの唯一無二の存在 (スター性) によって、オートグラフィックに作品の価値を担保するように
→そうになると、老いてアログラフィックな動きの遂行が困難になっても、スター・ダンサーがオートグラフィックに作品の価値を担保し続けることがある (例：ルドルフ・ヌレエフ／アリシア・アロンソ／森下洋子など)

- アログラフィックな基準でバレエ作品を見ると「古い」は困難を招くが、オートグラフィックな基準では必ずしも「古い」が排除されているわけではない

3.3 モダン・ダンス

アメリカの舞踊批評家ジョン・マーティンの 1933 年の有名な論考に代表される様に、モダン・ダンスをもってダンスは「動きの芸術」となった、と考えられがち (Lepecki, 2006)

→だが、オートグラフ／アログラフの図式を援用すると、モダンダンスはこの二極へのモダニズム的な「純化」(ラトゥール 2008=1991) として考える事もできるのではないか？

①アログラフィックな純化の方向

ダンス・メソッド、空間モデル、ノーテーションなどを追求したドルフ・フォン・ラバン(1879-1958)を代表例に、マース・カニングム(1919-2009)やロバート・ダン (1928-1996) を通しジャドソン・ダンスシアターへと受け継がれていく方向性

- 動きのコンポジションを追求 作品を形式的に決める
- フォルマリズム的 (形式への還元、表現の排除)
- 誰が動きを遂行しても同じ価値があることを目指すアログラフィックな方向性

②オートグラフィックな純化の方向

バレエのアログラフィックな傾向に抗し、上演における一回限りのオートグラフィックな「存在」をダンスの本質として取り出す

- 代表例：イサドラ・ダンカン(1877-1927)の「自由舞踊」
→型から (コルセットから・トウシューズから) 抜け出して踊る、即興的、動きが「型」にはめられることを拒否

自身が踊るオートグラフィックなスタイルの振付家も、ダンス・カンパニーになると「レパートリー」の問題が

→構造として反復可能なものにする必要が出てくる

例：マーサ・グラハム・ダンスカンパニー

グラハム自身の踊る作品 (オートグラフ) /カンパニー作品 (アログラフ) の区別

カンパニーダンサーはマーサの役を踊れない、あるいは困難である

面白い例：リチャード・ムーブによるグラハムのドラアグ・パフォーマンス (cf. Lepecki 2010)

→「贗作」がその真正性を認知されていくプロセス

3.4 ピナ・バウシュ(Pina Bausch, 1940-2009)

90s 以降のコンテンポラリーダンス→「動き」から「存在」へという変化の流れがバウシュの影響で起こった(Lepecki, 2004)

→これはアログラフィックからオートグラフィックへという移行であり、グッドマンの想定とは逆方向の動きでは？

バウシュの創作方法

- ダンサーにたくさんの質問を投げかけ、それへの反応をバウシュが編集

- 個人のエピソードや特徴が如実に出る
- 作品はオートグラフィ的なものとなり、キャストの交換が難しい
→ダンス・カンパニーという制度と矛盾するオートグラフィックな作品のあり方

バウシュ没後、再演に問題が出てくる

- ダンサーそれぞれの「解釈」が異なり、型をベースにしたアログラフィックな基準による再現が困難
- 映像からの再現
→元来のオートグラフィックな作品のあり方から離れていく
- バウシュの認めたダンサーたち本人が老いても踊り続けるほうがオートグラフィ的な作品が保てる
→だが、映像に記録された過去の上演とのズレが問題となってくる（アログラフ的な問題が持ち上がる）

オートグラフィックな作品と、アログラフィックなカンパニー制度の間の矛盾が、過去作品の再演を困難にするような状況を作り出している例

3.5 スウェーデン王立バレエとマッツ・エック作品

スウェーデンの強い社会保障制度: 42歳でダンサー引退、年金

→この社会保障がダンス・カンパニーのアログラフィックな制度を支える

マッツ・エック(Mats Ek, 1945-)

『白鳥の湖』(1987)『眠りの森の美女』(1996)では、「古い」たキャラクターが予言者的な位置づけ

ところが、身近な老いを扱う作品ではかなりバイオグラフィック的、生活的な側面の強い「古い」の表現に

例: ビルギット・クルベリ出演『老人とドア』アナ・ラグナ&マッツ・エック出演『Memory』
『ポテト』アナ・ラグナ&イヴァン・オーズリ出演『Axe』など・・・

『ジュリエットとロメオ』(初演: 2013年、スウェーデン王立バレエ)

(→児玉がベンヴォーリオ役で創作に関わった)

- 老いたアナ・ラグナ、イヴァン・オーズリ、ニクラス・エック (マッツ・エックの最も信頼する往年のダンサーたちであり、実際の家族またはそれに準ずる関係) が出演している。
- 彼らが踊った「乳母」と「大公」役
→『眠り』などに共通する老いたキャラクターの予言者的位置づけに加え、同時に作品内で「家族」でもある役柄
- マッツ・エックの物語作品は、多くが「家族」を大きなテーマにしており、『ジュリエットとロメオ』は構造・テーマ的に『眠り』と近い
- 『ジュリエットとロメオ』では身近な人々の現実における老いと、物語の中の老いが重なる

カンパニー内で作品が起こした変化

- バレエ・カンパニーのアログラフィックな制度と、老いたダンサーにズレ
- 最初は若いダンサーたちは「あんなの誰でもできる」と冷ややかな態度
→老いたダンサー達が、替えが効かない唯一無二のダンサーたちであることを認めるように

- 大きな制度的変化をもたらしたわけではないが、老いがダンサーの価値を下げるわけではないことに気づく
- アログラフィックな「動き」至上主義とは別のオートグラフィックなあり方

4. 結論

- 近年のダンス研究が明らかにしたように、ダンスはオートグラフィックとアログラフィックに分けられない芸術形式である。
- だが実践においてアログラフィックなダンスの「動き」とオートグラフィックな「存在」がいかに相互に影響しているかを分析する必要がある。その両者の拮抗の中に、ダンスの「作品」そしてそれを取り巻く制度がある。
- バレエなどの西洋における舞台芸術としてのダンスが老いを「排除」しているのはなぜか？「美的」問題だけではなく、作品概念やカンパニー制度との関係性の中で露わになる制度的な問題も大きい。
- ダンス作品はオートグラフィック／アログラフィックに固定化できない「生きられた実践」である。→ それゆえに老いと踊りをめぐる制度もオートグラフィック／アログラフィックの拮抗の中で更新され、変化していく余地がある。

[主要参考文献]

- 福島真人編, 1995, 『身体の構築学——社会的学習過程としての身体技法——』 ひつじ書房。
- Goodman, Nelson, 1968/1976, *Languages of Art: An Approach to a Theory of Symbols*, Indianapolis: Hackett. (戸澤義夫・松永伸司訳, 2017, 『芸術の言語』 慶應義塾出版会。)
- Kunst, Bojana, 2015, *Artist at Work: Proximity of Art and Capitalism*, Winchester and Washington: Zero Books.
- Latour, Bruno, 1991/1997, *Nous n'avons jamais été modernes*, Paris: Editions La Découverte. (川村久美子訳, 2008, 『虚構の「近代」——科学人類学は警告する——』 新評論。)
- Lepecki, André, 2004, “Concept and Presence: The Contemporary European Dance Scene”, Alexandra Carter (ed.), *Rethinking Dance History: A Reader*, London and New York: Routledge.
- , 2006, *Exhausting Dance: Performance and the Politics of Movement*, Oxon and New York: Routledge.
- , 2010, “The Body as Archive: Will to Re-Enact and the Afterlives of Dances”, *Dance Research Journal*, 42(2), pp.28-48.
- Leynoso, Jose L., 2019, “Democracy’s Body, Neoliberalism’s Body: The Ambivalent Search for Egalitarianism Within the Contemporary Post/Modern Dance Tradition”, *Dance Research Journal*, 51(1), pp.47-65.
- McFee, Graham, 2011, *The Philosophical Aesthetics of Dance: Identity, Performance and Understanding*. Alton: Dance Books.
- Pouillaude, Frédéric, 2009, *Le désœuvrement chorégraphique. Étude sur la notion d'œuvre en danse*, Paris: Librairie Philosophique J. Vrin. (Anna Pakes, trans., 2017, *Unworking Choreography: The Notion of The Work in Dance*, New York: Oxford University Press.)